

かごしま生涯学習センター研究会の設立と3年間の活動

鹿児島大学かごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門 小栗 有子
酒井 佑輔

はじめに

かごしま生涯学習センター研究会は、平成26年5月15日に鹿児島大学生涯学習教育研究センター（現 鹿児島大学かごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門）を事務局に立ち上がった。本報告では、この研究会の設立趣旨と特徴、これまでの活動について報告し、活動成果を振り返ることとする。

1. 研究会立ち上げの背景と課題意識

本研究会の立ち上げは、鹿児島大学の第2期中期目標・中期計画（平成22年～平成27年）の達成と次期中期目標・中期計画（平成28年～平成33年）に向けた生涯学習教育研究センターの将来ビジョンとも関係しているため、このことについて触れることから始めたい。

まず、本学の第2期中期目標・中期計画のなかで生涯学習教育研究センターが直接関係のある項目は、「1. 教育」と「2. 研究」以外の「3. その他の目標を達成するための措置」の「（1）社会との連携や社会貢献に関する目標を達成するための措置」である。ここには、該当する目標が二つあり、ひとつは「A20）地域のリーダーとなる人材を育成し、地域の活性化に寄与する」であり、もう一つが「A21）生涯学習に対する全学的な取組を推進する」であった。前者A20）の目標を達成するための計画は、「B31）島嶼学、鹿児島環境学、焼酎学を推進し、かごしまルネッサンスアカデミー等を継続するとともに、有為な人材を積極的に育成する新たなプログラムを構築する」であり、後者A21）の計画は「B32）「生涯学習教育研究センター」の機能を強化するとともに、各部局等の特色を活かした生涯学習プログラムを実施する」であった。

一方、生涯学習教育研究センターでは、第2期中期目標・中期計画の6年間に達成すべきセンターの将来ビジョンとして「学内の生涯教育体制の構築」を設定し、これを実現するために次の三つの目標を掲げていた。その目標とは、Ⅰ. 鹿児島県の学習文化を育む発信源、Ⅱ. 地域リーダー養成の拠点、Ⅲ. 地域に拓かれた生涯学習体制の整備であ

る¹。そして、第3期中期目標・中期計画においては、「学外との連携の本格化（特に教育委員会）」を将来ビジョンに掲げ、目標として、Ⅰ. 県教育委員会との本格的な連携、Ⅱ. 市町村教育委員会との本格的な連携、Ⅲ. 他大学生涯学習系センターとの本格的な連携を設定することを予定にしていた²。そして今回報告する「かごしま生涯学習センター研究会」との関わりは、上記で示した「A20）地域のリーダーとなる人材を育成し、地域の活性化に寄与する」と「Ⅱ. 地域リーダー養成の拠点」にある。以下でその理由を説明しておきたい。

まず、A20）の目標に関して「地域リーダー養成のための生涯学習教育研究センター独自のプログラムについて検討する」ことが、部局等年度計画に明記されており、具体的には、二つの方向性で実施を考えていた。一つは、鹿児島大学と鹿児島県の独自の資格として「地域教育計画士（仮称）」を育成することであり、もう一つは、国家任用資格の「社会教育主事」養成へのかかわりであった。いずれも社会人を想定した人材養成プログラムである。

先に前者について解説しておく、「地域教育計画士（仮称）」とは大学と地域をつなぐ教育専門家というイメージで、履修証明プログラムの制度を用いることを構想していた。当時の我々の課題意識は、大学と地域との連携を促し、win-winの関係をうまく構築するためには、両者の間に立つ社会教育の資質を備えたコーディネーターの存在が不可欠だというものであった。この考えは今でも変わらないが、組織再編などにより現在は構想が中断している状況である。

次に後者について補足すれば、「社会教育主事」養成への関心は、今回報告する「かごしま生涯学習センター研究会」を立ち上げようと思う直接の動機であった。詳細は次節に譲るが、教育専門職である社会教育主事を支援していくことは、鹿児島県の生涯学習・社会教育の現場の課題に直接コミットしていくことに通ずる。しかし、この専門家養成については本学だけでは難しく、オール鹿児島で取り

¹ 12月5日に開催した平成26年度に向けた学長ヒアリング資料として提出した「1. 部局における将来構想」より抜粋。

² 平成26年12月5日のヒアリングで使用した手持ち資料より。

組む必要性を当初より課題として認識していた。ここでいうオール鹿児島とは、県内の社会教育・生涯学習の研究者と鹿児島県教育庁をはじめとする教育行政機関との協力・連携という意味である。

ところで、本学は平成24年度より準備をはじめ、平成25年度に鹿児島大学生涯学習憲章の策定を行った。この大学生涯学習憲章の制定を中期目標・中期計画との関係でいうとその意味は、「A21) 生涯学習に対する全学的な取組を推進する」ための根拠となる枠組みを用意したことであった。一方、第2期中期目標・中期計画期間の「学内の生涯教育体制の構築」というビジョンを実現するためには、大学と地域をつなぐ仕組みとして、大学だけでなく、県も含むより大きな枠組み(制度)の必要性を改めて考えるに至った。そこで、第3期中期目標・中期計画期間に想定していた「学外との連携の本格化(特に教育委員会)」に向けて「かごしま生涯学習センター研究会」の設立準備に取り掛かった。

2. 研究会の設立経緯と趣旨

かごしま生涯学習センター研究会は平成26年に設立されたが、突然設立に至ったのではなくその前史があった。その名を「鹿児島社会教育ネットワーク研究会(かごしまマダム&ムッシュ研究会)」と称して、第1回の会合を平成24年7月24日に開催している。この会の目的は、翌年の6月22日に鹿児島県(会場:志学館大学)を会場に開催する日本社会教育学会九州・沖縄地区6月集会の企画準備会として招集されたものである。呼びかけ人は、会場校の志学館大学の岩橋恵子教授で、志学館大学と鹿児島大学の現職教員が初めて一堂に会することになった。この研究会は、各メンバーの研究紹介を中心に毎月開催され、6月集会当日までに全9回開催された。この研究会は当初の役割を終えていったん解散したものの、このような研究会の必要性は関係者の間では認識されていた。そして「かごしま生涯学習センター研究会」はこのような土壌の下で、名称とミッションを新たに復活することになった。

かごしま生涯学習センター研究会は、鹿児島大学、志学館大学等の社会教育・生涯学習の研究者を中心に鹿児島県教育庁の関係者(社会教育課、かごしま県民大学中央センター)にも参加してもらう形で平成26年5月15日に第1回の会合を開催した。第1回の会合で確認した本会の趣旨と性格は以下のとおりで、研究会の目標は中長短期ごとに設定された。

長期目標:鹿児島における社会教育主事講習の条件整備と支援体制の強化に向けて、鹿児島の社会教育・生涯学習を担う専門家養成にオール鹿児島(大学・県教委等が協力)で取り組む。

中期目標:長期目標を実行していくうえで、まず「鹿児島県社会教育を総括する」ことが必要である。この作業を通じて、これまで何が達成できていて、何が達成できていないのか。また、何を継承し、何を新たに作っていくのかを確認していく。そのために必要な研究スキームを明らかにし、実行する(共同研究体制の確立)。

短期目標:中長期目標を見据え、初年度は「社会教育主事の仕事を語り継ぎ、これからの社会教育主事の仕事を考えあう」ことを研究テーマに設定し、「鹿児島県社会教育を総括する」仕事の第一弾と位置づける。その作業を進めるために、「社会教育主事の仕事を語り継ぐ」ための視座や方法など研究の枠組みについて検討の上、試行的な活動を開始する。

研究会の構成メンバーについては、マダム&ムッシュ研究会を母体に、志学館大学と鹿児島大学の社会教育・生涯学習の現職教員を中心にコアチームを形成することを決め、ここに鹿児島県社会教育・生涯学習の現場に即して共同研究を進めるために、鹿児島県教育庁、および、市町村教育委員会の社会教育・生涯学習の関係職員もメンバーに参加してもらうことになった。研究会は、当面クローズドで行い、コアチームを中心に適宜声をかけながらネットワークを形成していくことも確認された。

研究会の活動は、原則月1回の「研究会」という方式を用いて当面の目標を達成することを目指し、研究会の成果としては、①共同研究計画の立案(目的、方法、作業分担等の確認)と②平成26年度の1月～3月の間で、本研究会と鹿児島県社会教育研究会が共催でセミナーを企画することなどを確認して「かごしま生涯学習センター研究会」は設立された。

ところで、研究会名は、鹿児島で歴史のある「鹿児島県社会教育研究会」と混乱を招かないことを意識した。鹿児島県社会教育研究会の設立は昭和37年にさかのぼり、主に鹿児島県教育庁と市町村教育委員会で社会教育関連労働の職にある/あった者を会員とし、組織の目的を「生涯学習の視点に立って、社会教育に関する研究をなし、会員の資質向上及び連絡提携を密にし、本県社会教育の向上発展に寄

与すること」としている³。会員は平成27年現在で396名である。一方、新たに立ちあげた研究会の構成メンバーが、鹿児島大学生涯学習教育研究センターと志學館大学生涯学習センターにかかわりがあるため「かごしま生涯学習センター研究会」とすることにした。

3. 研究会の活動概要

研究会の活動経緯については、【表1】に示す通りである。主な活動の成果について次節で改めて述べることにして、ここでは3年間の活動概要について整理しておく。

まず、3年間の活動を時期区分すると、平成26年度は新しい組織体制を確立する時期にあたり、メンバー間の情報共有と研究計画が主な活動であった。初年度の活動で特記すべきは、第3回の研究会で前述の鹿児島県社会教育研究会の事務局を預かる県立青少年研修センター所長と研修課長と情報交換の機会をもったことである。この出会いからかごしま生涯学習センター研究会の鹿児島県社会教育研究会との緩やかな連携・協力体制が、各々の実施する研修会等の活動に参加する形で開始されるようになった。2年目以降は、研究会の短期目標である「社会教育主事の仕事を

³ 鹿児島県社会教育研究会『あすへの道』NO.46、平成28年2月

語り継ぎ、これからの社会教育主事の仕事を考えあう」ための具体的な研究活動として、平成27年度は、前年度に立てた「社会教育主事ヒアリング実施計画」に基づくインタビューを実施し、平成28年度は、インタビュー作業の仕上げとそのとりまとめの年となった。

また、日常的な研究会活動のほか、年1回のペースで公開セミナーを開催することに努めた。初年度は、文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官の水畑順作氏を講師に招聘し、「鹿児島県の社会教育の仕事を担当する人の育成の現状とこれから」をテーマに県下の社会教育行政関係者と意見交換を行った。2年目の平成27年度は、鹿児島大学が委託を受けた文科省「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」で実施した「大学で話すみんなの暮らし」（事業名「産学官民による地域課題の協働的解決を促す学習交流プラットフォームの形成」）の3日間の企画とその運営に研究会として参加することになった。3回目のセミナーは、社会教育主事ヒアリングの成果報告集が完成した後の平成29年度の早い段階の実施を予定している。



平成26年度に実施した水畑氏を招聘しての公開セミナー



平成27年度「大学で話すみんなの暮らし」では研究会のメンバー各々が分科会等を担当した

【表1】平成26年度～平成28年度 かごしま生涯学習センター研究会 活動記録

平成26年度 活動の記録

- (1) 平成26年5月15日 鹿児島大学、志學館大学等の社会教育・生涯学習の研究者、および、鹿児島県教育委員会（社会教育課、かごしま県民大学中央センター）と今後の社会教育・生涯学習指導者養成に向けてかごしま生涯学習センター研究会（事務局：鹿児島大学生涯学習教育研究センター）を立ち上げる。

- (2) 7月2日 第2回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、本県社会教育の現状と課題、および、全国の社会教育主事の動向に関する報告を受け、協議を行った。
- (3) 8月6日 第3回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、鹿児島県社会教育研究会の現状と課題について、県立青少年研修センター所長、および、研修課長より報告を受け、協議を行った。
- (4) 11月5日 第4回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、「社会教育主事ヒアリング実施計画(案)」について、以下の点について主に検討をおこなった。
- ① ヒアリングを実施する目的、到達目標、内容の活用について
 - ② ヒアリングの実施方法について(日時、場所、参加者、進行等)
 - ③ ヒアリングの設問・全体構成(やわらかな問いを4～5個に厳選する必要性)
 - ④ ヒアリングを行う対象者の決定
- (5) 12月17日 第5回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、12月20日に実施する後田逸馬氏のヒアリングについて、以下の点について最終確認をおこなった。
- ① ヒアリングの目的、到達目標、内容の活用を確認
 - ② ヒアリングの実施方法と役割分担(日時、場所、参加者、進行等)
 - ③ ヒアリングの全体構成と設問
- (6) 12月20日 第6回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、後田逸馬氏のお仕事について次の点を主に伺った。①経歴と人事制度について、②携わった仕事と施策、③社会教育行政職。社会教育主事の力量について
- (7) 平成27年1月7日 第7回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1回社会教育主事経験者ヒアリングの振り返り、並びに、次回予定の前野喬氏のヒアリングについて検討した。
- (8) 2月23日 第1回「かごしま生涯学習センター研究会」公開セミナーの開催
「鹿児島県の社会教育の仕事を担当する人の育成の現状とこれから」をテーマに、文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官の水畑順作氏を招聘し、市町村レベルの現場の社会教育実践が、共通目標として何を中心におき、いかなる展開が求められているのかについて意見を交わした。

平成27年度 活動の記録

- (9) 4月23日 第8回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、平成26年度の活動の反省・振り返り、並びに、今年度の研究会の活動方針と計画について意見交換を行う。
- (10) 5月14日 第9回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、今年度の活動方針・計画（案）、及び、第2回社会教育主事経験者のインタビュー（5/30）に向けた準備を行う
- ① 方針・狙いについて
 - ② 社会教育主事経験者のヒアリングについて
 - ③ 鹿児島県社会教育研究会との連携について
- (11) 5月30日 第10回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第2回鹿児島県社会教育主事経験者ヒアリングを行った。
- ① 午前：穂園正幸氏
 - ② 午後：西雅生氏

質問項目

- (1) 経歴と人事制度について
- (2) 携わった仕事と施策
- (3) 社会教育行政職・社会教育主事の力量について

- (12) 6月10日 第11回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、鹿児島社会教育研究会夏季セミナーの企画、並びに、第3回社会教育主事経験者のインタビューに向けた準備を行う。
→ 夏季セミナーの議論を受けて、平成27年度文部科学省新規事業「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業～地域力活性化コンファレンスの創設～」の企画を詰める
- (13) 6月20日 第12回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第3回鹿児島県社会教育主事経験者ヒアリングを行う。
① 午前：神之門 透氏
② 午後：牧 悦朗氏
- (14) 7月30日 第13回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1～3回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ（その1）、鹿児島社会教育研究会夏期セミナーの企画・進捗確認等、文部科学省事業の申請と開催準備について文部科学省事業の申請と開催準備について協議する。
- (15) 8月25日 第14回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1～3回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ（その2）、および、文部科学省事業の申請と開催準備について協議する。
- (16) 8月26日 第15回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1～3回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ（その3）、および、文部科学省事業の申請と開催準備について協議する。
- (17) 10月1日 第16回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1～3回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ（その4）、および、文部科学省事業の申請と開催準備について協議する。
- (18) 10月11日 第17回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第4回鹿児島県社会教育主事経験者ヒアリングを行う。
① 午後：松下 尚明氏
- (19) 10月14日 平成27年度文部科学省委託事業「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」の第1回実行委員会と企画チーム（かごしま生涯学習センター研究会）との合同懇親会を開催する。
- (20) 以降2月6日まで平成27年度「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」大学で話すみんなの暮らしに向けた準備を行う。
- (21) 2月6日～8日 平成27年度「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」大学で話すみんなの暮らしを開催する。

平成28年度 活動の記録

- (21) 平成28年5月20日 第18回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、第1～3回「社会教育主事経験者ヒアリング」のとりまとめの方針、内容・方法、分担について検討し、①二種類の「まとめ」、②年表作成、③作業分担などを確認する（中間まとめ（その5））。また、次回の研究会では、尾ノ上義直さんにインタビューを行うことを決定する。
- (22) 平成28年7月30日 第19回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、午前中は、「第1～4回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ（その6）」の検討を行い、午後から第5回鹿児島県社会教育主事経験者ヒアリングを行う。
① 午後：尾ノ上義直氏

- (23) 平成28年8月16日 第20回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、「第1～4回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ(その7)」を議題に、主に分析編のあり方について検討を行う。
- (24) 平成28年11月3日 第21回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、「第1～4回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ(その8)」を議題に、出来上がり冊子のイメージの確認と報告会のあり方について検討を行う。
- (25) 平成29年1月19日 第22回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、「第1～4回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ(その9)」を議題に、とりまとめの準備状況の確認、及び、ヒアリング実施前に設定した目標に対する達成度と今後の課題について協議を行う。
- (26) 平成29年2月28日 第23回かごしま生涯学習センター研究会を開催し、「第1～4回「社会教育主事経験者ヒアリング」の中間まとめ(その10)」を議題に、次の冊子の構成に基づき、進捗状況の確認を行う:序章(2～3頁)、生データ(24～25枚×6名分)、まとめ(共通フォーマットにて4頁×6名分)、考察(3頁×6名分)、年表。

4. 研究会の活動成果と今後の展望

平成26年にかごしま生涯学習センター研究会が立ち上がり、3年が経過しようとしている。この3年間で振り返ってみた場合に、何が達成できたといえるのだろうか。この際の評価は、3つの視点から考えることが必要であると思われる。一つは鹿児島大学の立場から見てどうなのかということ、二つには、鹿児島県の生涯学習・社会教育研究の立場であり、三つめが、鹿児島県の生涯学習・社会教育の実践現場の立場である。いずれの視点も関連し合うものであるが、あえて構造化するとすれば、鹿児島県の生涯学習・社会教育の実践現場をまずもって中心に置くべきであろう。そして、第二の視点である生涯学習・社会教育研究の立場とは、鹿児島の実践現場のリアリティに立って国内外の研究動向を視野におきながら、鹿児島県固有の特性や課題をつかみ、生涯学習・社会教育の実践現場に何を返すことができているのかを問う必要がある。もちろん鹿児島県の経験から生涯学習・社会教育研究の発展にいかに関与できるのかという課題も一方では横たわる。他方、第一に挙げた鹿児島大学の立場は、大学として鹿児島県の生涯学習・社会教育に対していかなるかわりと責任を担うのかについて、一つの大学の中で自己完結するのではなく県域全体をその視野に収めて大学の生涯学習を展望することが求められるであろう。

以上の視点を踏まえて3年間の活動成果を総括するとすれば、これまでともするとバラバラに課題に取り組んでいた3つの立場(視点)をつなぎ合わせるための緩やかなプラットフォーム(研究グループ)が形成されつつあるとい

うことになるだろうか。研究会のコアメンバーは現在のところ、社会教育を専門にする現職大学教員のほかに教育史や保育、図書館などの専門家である。また、ここに県社会教育行政の立場から情報共有を主目的とした参加を得ている。地道な研究会活動を継続することで、メンバーの間で鹿児島県の生涯学習・社会教育の特徴や課題の共通認識が徐々に図られつつある。

読者のなかには意外に思われる方もおられるかもしれないが、大学教員と社会教育行政職員の双方が参加する緩やかなネットワークというものは、これまで鹿児島県下ではあまり見られない動きであった。もちろん個々の教員と個々の職員という個別な関係については多くの実績がみられる。冒頭でも述べたが、本研究会の主な特徴は、一つの大学を超えて研究者ネットワークと社会教育行政職員ネットワークの交わりを意識的に創出することにあった。

3年間の研究会の活動成果を顧みた際に、平成26年度と平成27年度に実施した単発の公開セミナー等のイベントは、当日までのプロセスも含めて関係者のネットワークづくりがおおやけではないもう一つの目的であった。その目的が十分に達成できたのにわかにいえないが、研究会としての地道な研究会活動とネットワーク形成との相乗効果を今後はかることが期待される。

来年度の早い時期に、研究会がこの3年間主に取り組んできた鹿児島県社会教育主事経験者に対するヒアリング結果の取りまとめが「かごしま生涯学習センター研究報告書(仮称)」の創刊号が刊行される予定である。この研究報告書は、鹿児島県の社会教育専門職である社会教育主事が、

過去にどのような仕事をされてきたのかをヒアリング対象者6人についてまとめたものである。この研究は、研究会の中期目標である「鹿児島県の社会教育を総括する」ための仕事として手掛けたものである。研究は途についたばかりで、今後さらに深めるべき研究課題が明らかになったに過ぎない。だが、小さな成果であれ、これらを現場の方と共有し、活用の道を探っていくことが大事だと考えている。現場の方との対話を重ねることで、恐らく研究のスキームも変わっていかざるをえないだろう。この過程が、現場に資する研究成果を上げるために必要な模索だと心得たい。

3年間の活動を経て、ようやく研究会活動成果を生涯学習・社会教育の現場を預かる関係者らと共有できる条件が整った。今後は、研究会のメンバーを少しずつ広げながら活動を継続し、研究者と生涯学習・社会教育が交流し合える、本研究会の設立趣旨に少しでも近づくことを目指していきたいと考えている。一方、社会教育・生涯学習の現場と研究が組織的に結びつくことで、大学としても地域の必要や要求に対してより適切に対応していけることが期待される。道のりはまだ長いが、大学の限られた資源を最大限に生かすためには、地域のニーズ把握と適切な方法論を選択できるための情報集約が不可欠である。着実に成果を上げていけるようにしたい。